

氏名	TOMAR, Varun トマル, ヴァルン
学位の種類	博士(学術)
学位記番号	甲 第 2 1 9 号
学位授与年月日	2 0 2 0 年 6 月 3 0 日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位論文題目	Role of Nationalism in India's Relations with Japan - A Neoclassical Realist Interpretation インドと日本との関係におけるナショナリズムの役割 -新古典的現実主義解釈
論文審査委員	主査 教授 フォッセ, ヴィルヘルム M. 副査 教授 シャーニー, ジョージアンドレア 副査 教授 徐 載晶

論文内容の要旨

この博士論文は、冷戦後のインドの外交政策におけるナショナリズムの役割を探ろうとしました。ここでは、これらの年の間にインドの関係が日本とどのように発展し、変化したかに焦点を当てています。この質問に答えるために、新古典主義の現実主義的アプローチに基づく概念的なフレームワークを採用しています。この研究はまた、現代インドにおけるナショナリズムの起源と性質、およびヒンドウトバ (Hindutva) がインドの外交政策にどのように影響するかを分析しました。

論文は、ナショナリズムの台頭が国家としてのインドの見方を大きく変えており、これは日本との変化する関係にはっきりと見えると主張しています。国家の外交政策を定義する際にナショナリズムのような国内要因を組み込むのに最適であると考えられているため、IRで新古典主義リアリズム (NCR) アプローチを使用することに着手しました。NCRは外的要因と国内的要因を同等に重要視しており、これにより、インドの外交政策がネルービアン社会主義から BJP に基づく現実主義的な社会主義へと変化した背後にある根本的な論理を包括的に理解できます。これは、インドが議会の統治期間 (1991 年まで) の間、ネルーの社会主義を遵守していたため、重要です。しか

し、1992年にBJPはインドで主流の政治に参入し、それを強力で裕福な国家を促進するより男性的なヒンドゥツヴァと統合しました。論文は、ナショナリズムがインドの外交政策を説明するNCRモデルの顕著な特徴を最もよく説明できると同時に、他のもっともらしい外部変数を認めていると主張しています。

日本の限りでは、ナショナリズムの台頭と、戦後の日本の従順な立場を認識しない歴史的修正主義の成長、そしてとりわけ憲法改正、教育制度の改革のためのキャンペーンを見ることができます。愛国者の価値観を教えること、靖国神社への注目度の高い訪問、そして反中国感情の高まりを含む。結果として、これは過去20年間にわたって日本の外交政策に強い影響を与えてきました。さらに、東シナ海や尖閣諸島周辺での中国の積極性の高まりとトランプ大統領のもとでの予測不可能な米国の外交政策の組み合わせにより、日本やインドなどの米国のパートナー国は、地域の利益を守るためにより緊密に協力するように求められています。後者の外部ダイナミクスは、ナショナリズムの台頭を緩和する要因です。このシナリオは、強化された日印パートナーシップの基盤を築きました。インドと日本では、外部ダイナミクスがナショナリズムの台頭に重要な役割を果たし、外交政策に影響を与えました。

この論文の主要な質問は次のとおりです。(1) 冷戦後のインドの外交政策の変化におけるナショナリズムの役割は何ですか？ この質問に答えるために、(a)現代インドのナショナリズムの源泉と性質、(b)ヒンドゥーヴァ(Hindutva)がインドの外交政策にどのように影響を与えているか、そして(c)ヒンドゥーヴァの復活が日本に対するインドの外交政策にどのように影響を与えているのかを具体的に定義したいと思います。

この論文の主要な仮説は、(1) 1980年代のBJPの台頭とヒンドゥツバイデオロジーの復活がヒンドゥーナショナリズムの台頭をもたらし、カウティリヤ(Kautilya)とサヴァルカル(Savarkar)からそのイデオロギー的支持を引き出し、強力で男性的な国家を正当化したというものです。(2) 他の構造的要因は別として、ヒンドゥーナショナリズムは現代のインドの外交政策の背後にある主要な推進力であること。(3) 冷戦中、両州は対立する勢力と連携していたが、インドはヘッジとバンドワゴンというカウチリアン(Kautilyan)の戦略に従って日本との強力なパートナーシップを築いてきた。

論文は6つの章で構成されています。上記の研究の質問、仮説、新古典主義リアリズム(NCR)の使用理由を紹介した導入第1章の後に、第2章では、インドの外交政策で進行中の議論の概要を示し、インド国内の外交政策について議論します国際関係理論の枠組み。この章では、ネオリアリズム、ネオリベラリズム、構成主義などの代替

IR 理論に重みを付け、これらの理論ではインドの外交政策の変化を説明するのに十分ではなく、新古典主義リアリズム (NCR) が国内で外交政策の決定を説明するためのナショナリズムのような要因。第 3 章では、ナショナリズムを定義し、ナショナリズムに関連するさまざまな理論、特にナショナリズムの 3 つの主要な理論、つまり原始モダニズムと民族の象徴主義理論を分析してから、インドのナショナリズムの性質を理解する上での有用性を説明します。第 4 章では、インドにおける近代以前のナショナリストのイデオロギーと植民地時代のナショナリズムについて説明し、植民地時代に起こったヒンドゥーのナショナリストの思想とその変化について説明します。論文は、その後、バーラティヤ・ジャナタ党 (BJP) の台頭とそのイデオロギーのルーツを説明しています。この章の第 2 部では、日本における戦前と戦後のナショナリズムを分析した後、ネオ修正主義運動と安倍首相の政権との関連性を分析しました。第 5 章では、日印関係の歴史的变化について説明します。これらは 2 世紀と 6 世紀に始まりますが、主な焦点は、第二次世界大戦中のインドへの日本の援助と日本でのインド国軍の設立です。次に、両国が外交関係を前向きに始めたにもかかわらず、冷戦中のさまざまなブロックのために強い関係を構築できなかった方法について議論します。インド経済が 1990 年代の日本を含む世界への市場に自由化するにつれ、その関係は徐々に深まりました。2000 年の森首相の訪問は関係の正常化につながり、日本の小泉政権と安倍政権、インドのヴァジパイ政権とモディ政権の間にさらに深まり、戦略的パートナーシップにつながりました。第 6 章では、インドと日本の関係においてナショナリズムが果たしてきた役割とそれが外交政策にどのように影響したかを説明する際に、前の章の説明をまとめました。

論文審査結果の要旨

博士論文防御は、2020年5月14日の19:00にテレビ会議で行われ、20:30に終了しました。評価委員会は、論文のトピックの3つの異なる側面をカバーする3人のメンバーで構成されました。インド亜大陸に焦点を当てた国際関係と政治思想の専門家としてのシャーニー、ジョージアンドレア教授、東アジアの国際関係学者および国際関係の専門家としての徐載晶教授、フォッセ、ヴィルヘルム M 教授の議長日本の外交・安全保障政策と安全保障パートナーシップの専門家。

徐教授は著者に新古典主義のリアリズムの使用について、そして安全保障環境の変化や中国の台頭などの要因が過去20年間の日印関係におけるインドの外交政策を等しく説明できないかどうかを尋ねた。著者は彼の理論の選択を説明したが、彼は論文を通してそれを十分に活用していなかったことを認めた。NCRは第2章で紹介されていますが、著者は結論に戻るだけで、論文全体ではありません。これに続いて、原始主義者、モダニズム、および民族記号論の理論の著者の区別についての質問が続きました。

シャーニー教授は、著者がなぜ民族記号論を使用しなかったのかという疑問を持ち続け、なぜモダニズムのアプローチをとっているのであれば、なぜ論文が原始主義者の説明に多くの時間を費やしているのかと疑問を投げかけました。彼はまた、インドの外交政策は、ヒンドゥーのナショナリズムだけではなく、民族シンボリストの理論と組み合わせたカウチリアの戦略でよりよく説明できないかと尋ねました。最後に、著者はなぜネルービアン外交政策の策定において反植民主義が果たした役割を説明しなかったのかと尋ねた。

フォッセ教授は筆者に、日本の外交政策が権力政治により重点を置くようになった理由と、中国の軍事主義の台頭など他の要因がナショナリズムよりもこれらの変化をよりよく説明していないかどうかについて尋ねた。委員会のメンバーによるこれらおよび同様の質問への彼の応答において、著者は、NCRを擁護したり、NCRだけを使用したりするのではなく、しばしば現実主義者の議論に言及しました。フォッセ教授はまた、この論文がNCR内の言説にどのように貢献するか、およびIR理論への貢献が何であるかをより明確に説明する結論が必要であることを要求しました。

弁護後、委員会は、論文がインドと日本のナショナリズムの非常に詳細な歴史的概要を提供している一方で、ナショナリズムがより「男性的な」外国人の増加を説明する唯一または少なくとも支配的な要因であることを十分に示さないことに同意しました両国の政策とその関係の深化。論文はまた、選択された新古典主義リアリズムのIR理論を論文に十分に統合せず、唯一の実行可能な理論として使用しません。さらに、ナショナ

リズムへの著者のアプローチと、それがインドの外交政策において果たした役割を明確にする必要がありました。

したがって、委員会は彼の議論を強化し、彼の選択した IR 分析フレームワークをより有効に活用するために、著者にさらに 10 日を与えることを決定しました。特に、結論は、ヒンドゥーナショナリズムとネルー政権下の反植民地ナショナリズムが外交政策にどのように影響したかをより明確に示す必要がありました。

著者は、割り当てられた期間内に改訂された論文を委員会に提出しました。委員会は、結論が改善され、防衛におけるヒンディー語のナショナリズムの役割について提起された問題のほとんどにある程度対処したことに同意した。しかし、ネルー政権下でのインドの外交政策に対する反植民地ナショナリズムの影響にまだ十分に取り組んでいない。さらに、サブタイトルで約束されているように、説得力のある新古典主義リアリストの解釈と説明はまだ提供されていません。一方、委員会は、論文が、特にインドの外交政策決定に関する現在の言説に貢献できることを認識しています。現在のインドのモディ首相の政策決定だけでなく、程度は低いものの、日本の安倍晋三首相の政策決定も。

長い審議の後、委員会は、その理論的欠点にもかかわらず、主に国際関係ではなく歴史における著者の背景に起因する可能性があること、およびインドのヒンドゥーナショナリズムと修正主義的ナショナリズムの間の依然として弱い因果関係にもかかわらず日本は彼らの外交政策決定の唯一の説明として、インドの外交政策の分析に貴重な貢献をしており、日印協力を深めるためのいくつかの理由も提供しています。これらの理由により、評価委員会のメンバーは、論文が「C」のグレードに値することに全会一致で同意しました。結論として、評価委員会はトマール、ヴァルン氏に博士号を授与することを推奨しています。